



TITLE:

ジョン・デューイはどうして宗教哲学者なのか――アメリカ哲学における宗教・政治・消費という論点をめぐって――(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

谷川, 嘉浩

CITATION:

谷川, 嘉浩. ジョン・デューイはどうして宗教哲学者なのか――アメリカ哲学における宗教・政治・消費という論点をめぐって――. 京都大学, 2020, 博士(人間・環境学)

ISSUE DATE:

2020-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k22527>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	谷川 嘉浩
論文題目	哲学者、ジョン・デューイはどうして「宗教哲学者」なのか ——アメリカ哲学における宗教・政治・消費という論点をめぐって——		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>申請者谷川嘉浩氏による本論文は、20世紀のアメリカを代表する哲学者の一人であるジョン・デューイの宗教論を中心に、彼の社会哲学・実践哲学の全容を解明しようとするものである。</p> <p>第一部（第一章から第三章）は、デューイの宗教論を内在的に明らかにすることを目的としている。デューイの宗教論は、従来の宗教論と異なり、彼自身の非常に特異な観点によって形成されている。それを明らかにしつつその構造が示される。</p> <p>第一章は、デューイの宗教論に関わる最も重要な著作である『共同の信仰』を中心的なテキストとし、その重要な概念の解明およびそれらの関連を明らかにしようとするものである。それによって、デューイの宗教論がどのようなものであるのか、そしてその公共性・社会性にかかわる基本的な考えが明らかにされる。</p> <p>第二章は、宗教的な「覚醒」体験についてのデューイの記述を元に、その経験解釈の多様性・不安定性の理解を経て、自らの無知を自覚し他者との連帯を重視する、民主主義的な理想へと向かう可能性について論じられている。</p> <p>デューイにおいて「宗教的なもの」は理想を生み出しそれを目指そうとする点にあるが、その際、想像力はその中心的な役割を果たす能力である。このデューイ哲学における「想像力」がいかなるものであるのかが第三章で論じられる。その際、ロマン主義がその源流であることがエイブラムズやファーストの議論をもとにして論じられつつ明らかにされる。</p> <p>第二部（第四章から第六章）は、デューイの公共哲学に焦点が当てられる。第一部と異なり、第二部以降は、いわゆる宗教に直接関わるかのように見える議論は背景へと退いて行くが、デューイの「宗教的なもの」は公共性や社会性の中でデューイが維持しようとした「理想」と密接に関係する概念であり、ある意味でデューイの宗教論と無関係にあるわけではない。</p> <p>第四章は、精神分析学者のエーリッヒ・フロムに対するデューイの影響関係が論じられ、フロムの宗教論とデューイの宗教論の違い、そしてデューイの宗教論がより社会的であることが強調される。</p> <p>第五章は、有名なデューイとリップマンの論争を取り扱ったものである。通説として、公衆を重視するデューイとテクノクラートを重視するリップマンという対立構造で語られることの多い両者の関係だが、この対立構造が一種の誤解に基づくものであることが論じられる。さらに、リップマンの「ステレオタイプ」とデューイの「先入見」が対比され、リップマンがデューイから影響を受けつつも、デューイの「先入見」の概念を誤解することによって、自らの民主主義の理論に行き詰ったことが明らかにされている。</p> <p>第六章は、デューイによる公共哲学の問題、特に、公共性と私秘性の関係が論じられる。デューイの宗教的態度が、理想的なものへと向かう態度であり、それが共同体に共有される公共的なものである以上、デューイの公共哲学は彼の宗教論とも無縁なものではない。</p> <p>第三部（第七章から第九章）は、デューイの社会実践的な哲学について焦点が当てられる。とはいえ、デューイ自身に焦点が当て続けられるわけではなく、デューイが生きた時代のアメリカの社会的状況がまず焦点を当てられ、その中でのデューイの思想が重</p>			

ね合わされる。それゆえ第三部は、既に述べたように、デューイの存在自体はやや後景へと移行しているが、それを端的に示すのは第七章であり、ここでは20世紀半ばにアメリカの消費社会について鋭い批判を与えたブーアスティンに対する批判を再検討することを手掛かりにしながら、彼の主張の中の重要な概念である「イメージ」を検討し、続く章の背景を提示している。

第八章は、デューイの理想概念について、第七章で行われたブーアスティンのイメージの議論と比較しつつ、その優位性が明らかにされる。個別的な理想と自己超越的な理想という理想の二重構造が論じられる。デューイ自身の思想において主要な地位を占める「理想」概念が明らかにされる点で、極めて重要な章となっている。

第九章は、アメリカの民主主義に大きな影響を与え、アメリカらしい民主主義を代表とするジェファースンの議論を、ブーアスティン、リップマンがどのように継承したのかとデューイがどのように継承したのかを対比することによって、デューイがジェファースンの議論を積極的に取り入れ、民主主義的な思想を形成していることが論じられる。そして後のローティなどの連帯の思想などへの関係性が論じられ、その現代的な意義が述べられる。

(論文審査の結果の要旨)

20世紀のアメリカを代表するプラグマティストであるジョン・デューイの哲学は、20世紀後半に登場したリチャード・ローティやヒラリー・パトナムといった「ニュー・プラグマティスト」の影響のもと、再び大きな注目を受けている。しかし、周知のように、デューイは、認識論的問題から教育学的問題、社会的問題など、非常に多岐にわたる領域に多大な発言をしており、その難解な主張もあって、その全貌を把握するのは容易ではない。そしてそのようなデューイ哲学の中には、宗教論と言えるようなものも含まれているが、デューイ研究の中ではその領域に焦点を当てた研究はまだまだ少ない。その理由として、デューイ自身による、宗教論が詳細に述べられている著作が、その膨大な全著作に対してかなり限定的であること、そしてデューイの宗教論が、一般的な宗教論と大きく異なるスタンスのものであるために、かえってそれが反宗教的に見えるということなどが考えられよう。しかし、独特ではあるが、デューイの宗教論はやはり宗教論であり、そしてそれはデューイ哲学全体に浸透する重要な思想であることを明らかにしようとしたのが本論文である。

デューイの宗教論とは、制度化され、超自然的な存在者をわれわれに対する権威として前提する個々の宗教から、本来のかつ自然的な宗教的なものを救い出そうという試みとして論じられている。その宗教的なものとは、環境を変え、それによって自らも変化するという適応によって自らを発展させつつ、想像力によって掴み取る「理想」へと向かうわれわれの態度のことである。こういった態度こそが、宗教的なものであるとデューイは言う。そしてこのような態度は、デューイ哲学の根幹とも言える生き方としての民主主義にとって欠かせないものなのである。

このようなデューイの宗教論の内容から、本論文の扱う対象は極めて広範なものとなっている。

まず第一部では、デューイの宗教論それ自体の明確化のために、そこに含まれる理想、想像力、信仰などに関わる概念が詳細に検討される。それぞれの概念がどのような連関を持っているかなども従来十分に整理されてこなかった点であり、この点についての論者の試みは、デューイ哲学の基礎研究を提供するものとして注目に値する。さらに、デューイをロマン主義の系譜に位置付けることはローティなどによってもなされているが、論者はさらに、どのようにデューイが「想像力」の概念をロマン主義から受けつぎ、そしてそれをどのような形で独自のものへと再構築しているのかを具体的に明らかにするなど、歴史的なアプローチも用いることによって、思想史研究としても興味深い成果を出していると考えられる。

第二部では、第一部での議論を元にしたデューイの公共哲学の議論に焦点が当てられる。アメリカの精神分析学者エーリッヒ・フロムとデューイの影響関係、また、有名なリップマンとデューイによる民主主義をめぐる論争など、ほかの思想家との比較を通じて、デューイ自身の思想的內容が際立てられている。特に、リップマンとの論争については、それが従来考えられていたような単純なものではなく、リップマン自身に思想の複雑な展開があり、またリップマンの「ステレオタイプ」とデューイの先入見との違いによって本来非常に密接な影響関係にあった両者の関係にズレが生じることが明らかにされるなど、意義ある主張が展開されている。

第三部では、デューイ哲学の社会哲学が論じられる。第一部に比べると、宗教的な問題は、背景に後退しはするが、そこで述べられる連帯の問題や理想への態度など、デューイ哲学の精神とも言える民主主義的な問題の核心でもあり、そこに、第一部以

降述べられてきた宗教的なものがどのように機能するかが論じられるなど、意義ある研究成果が示されていると考えられる。

本論文は、こういった大変広範なテーマを、デューイの宗教論を中心に扱っているがため、個々の議論においては、まだやや深まりが足りない点などもないわけではない。例えば、自己超越などの問題は、今度もさらなる発展的研究が期待される箇所である。しかし、そういった点はあるものの、上述したような本論文が有する大きな成果を考えて、本論文におけるデューイ研究の意義は、十分に示されていると考えられる。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和2年1月30日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、出版に差し障りがなくなるまで、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 令和 年 月 日以降